

吉野ヶ里

山田真砂年

黄葉踏みゆけばいつしか紅葉踏み  
初鴨の尻振りをればなつかしき  
実葛邪心といふものつやつやす  
枯葉鳴らす風の大らか吉野ヶ里  
城柵を出でて墳墓へ枯野道

甕棺の広さや冬のうららかに  
案内板に漢語ハングル冬うらら

英彦山神社 二句

神前に小春日の身を二つ折り

お社の裏手に武蔵鎧の実

都府楼の百の礎石に時雨かな  
かしこみかしこみ退屈に泣く七五三

老いも樂し天満宮に冬紅葉

冬の蠅ガラスきれいに磨かれて

暖房の音あり漢書横積みに  
鍼力屋の硝子に冬日屈折す

着ぶくれし婆の撒きをる鳩の餌

すれ違ふとき風のあり社会鍋

城跡や冬のたんぽぽ這ふやうに  
ゑのころの枯れて身軽や風を呼ぶ

ぬくぬくと陽をけぶらせて枯木山  
冬木立風は自在に行き交へり

小春日のなんと嬉しき小諸かな  
野晒しのごとし日陰の花八つ手  
晴れ渡るミナトミライや冬木の芽

真青な空の底なり枯木山